

農林水産省 東北農政局 秋田県拠点

秋田ニュース

秋田県拠点では、管内農業者及び関係者等の地域活性化に向けた取組を紹介します

Stationed at Akita Prefecture Area,
Tohoku Regional Agricultural Administration Office大潟村から
発信!

農業と福祉の連携



農福連携は、障がいのある皆さんに農業で活躍してもらい、自信や生きがいを持って社会に参画していただく取組です。担い手不足や高齢化が進む農業分野においては、働き手の確保につながるるとともに、共生社会の実現にも貢献するものです。

近年、農業経営体による障がい者の雇用や、障がい者就労施設等による農業参入・作業受託など、様々な形で動きが見られるようになってきています。今号では、大潟村で農福連携を実践している農業者、障がい者就労施設の職員として奮闘している方、大潟村社会福祉協議会の取組について紹介します。

障がい者就労施設の利用者を
受け入れて5年目水稲、トルコギキョウ、かぼちゃ栽培農家
佐藤 千穂さん

夫婦で農業を営む佐藤さんは、平成27年から障がい者を受け入れ、農福連携を実践しています。その内容について伺いました。

○農福連携を実践して5年目、振り返ってみてどうですか？

始めたときは、お手本もなく相談相手もいなくて全てが手探りの状態でした。

農園で何名必要なのかも考えず、働く意思のある方にどんどん来てもらいました。障がいの種類も様々あるので、その人の特性に合った作業を考えなければならず大変でした。

また、農園の経営や作業効率を考えたら人を選ばなければならぬ

でしょうが、効率だけを追い求めて良いのかという葛藤もあります。



○どうやって乗り越えましたか？

私が通っている秋田県次世代農業ビジネス塾の講師や塾生、社会福祉法人南秋福祉会農福連携サポートつくしのスタッフの力を借りました。

障がい者の方が仕事をしやすくなる方法や労働環境の改善などについて相談し、ミーティン



ホワイトボードに作業内容を分かりやすく記載

グスペースに設置したホワイトボードに作業の進捗状況、人の配置や作業内容を分かりやすく記載し、全てのことを「見える化」しました。また、器具機材の種類毎に定位置を決め、どこに何があるのかを理解するため、全員で整理整頓しました。



○成果と今後の課題は何ですか？

作業を「見える化」した結果、障がい者の皆さんが自分たちで考えて作業できるようになり、5年前に比べるとすごく効率的に作業ができるようになって、農園全体が変わりました。

日々成長し変化する植物相手の作業に苦労しながら、皆さん生き生きと作業をしています。労働の喜びを実感していることが伝わり、私たちも元気を貰っています。農園としても全体的に成長できたと思います。

貴重な労働力として農福連携が切っても切れないものとなっています。

農福連携を単に労働力として捉えると、効率性や生産性が重視され、重度の障がい者は置き去りになる可能性がありますので、その人の特性を活かし、農業と福祉をうまくつないでくれる機関や人材が必要だと思っています。

農業と福祉の 適切なマッチングが課題

社会福祉法人南秋福祉会
農福連携サポートつくし 施設外就労担当

本川 友美 さん



農福連携サポートつくしの利用者が、農家のほ場で農作業を行う際、その支援員として日々奮闘している施設職員の本川さんから、現在の状況や課題を伺いました。

農作業をやる中で、ありのままの自分を受け入れてくれているという安心感があるのだと思います。障がい者の心身に与える好影響が期待されます。

○福祉の側から見て農福連携の課題は？

一人ひとりの特性を理解し、その人に合った作業を提供していくためには、多くの就労先を見つけ出すことが求められます。

農家での労働力不足の話は聞くものの、福祉側とすれば具体的な農作業を想定できないため、農家に対し、障がい者就労に向けたアプローチを積極的にできないのが現状です。

今まで福祉に関わってこなかった人の中には、「障がい者」と聞いただけで身構えてしまったり、不安があるのも現実ですが、その障壁を取り払うこと



も必要です。私たちの取組によって理解が進み、就労の受け入れ先が広がることを期待します。農福連携を進め

○福祉施設の職員として農福連携に携わってみてどのような感想をもちましたか？

今担当している花きの栽培の知識がなかったので、インターネットなどで情報収集したり、知人から教えて頂くなどスキルアップに努めました。農産物の栽培は色々な種類があるので、悩みが尽きません。相談できる窓口や研修があれば良いと感じています。

○障がい者の皆さんにはどんな効果がありますか？

それぞれ障がいの種類は違いますが、草むしりひとつをとってみても、手抜きせずまじめに作業をしてくれます。それを見て多くの農家の方々が感心しますし、私たちも勉強になります。

ていくためには、農業と福祉の両方を知る立場で、両者を適切にマッチングするコーディネーターが必要です。それが行政なのか福祉機関なのか分かりませんが、農福連携を前進させる近道と感じています。

～村全体で共生社会を～「農福連携ファーム」を整備 大潟村社会福祉協議会の取組

大潟村社会福祉協議会では、村の補助金を活用して「農福連携自立支援事業」に取り組んでいます。

同協議会のほか、障がい者施設である大潟つくし苑、農福連携サポートつくし、JA大潟村、大潟村特産南瓜生産組合などの関係機関・団体で実行委員会を組織し、平成30年に村有地1.6haを借り受けて開墾し、「農福連携ファーム」を整備しました。障がい者に加え、高齢者や外出機会の少ない人等へ就労・活動の場を提供し、村全体で共生社会の実現を目指しています。

今年は0.9haのほ場にかぼちゃの苗2,600本を植付け、栽培しました。生産したかぼちゃは、JA大潟村へ出荷するほか、お菓子の原料として大潟つくし苑に販売しています。活動資金に限りがあり農業機械等も所有していないため、同協議会や村内の農業者がボランティアとして協力しています。

実行委員会では、「参加者には達成感があり好評である。農業は色々な人が関われる作業があるので福祉の事業に向いている。」と話しています。また、「通年で作業できれば理想的。将来的には安定して運営できるように園芸施設等も導入したい。」と意欲を燃やしています。



かぼちゃの栽培作業